

「嫌悪」を表す動詞の意味分析

—「嫌う」再考—

馬 場 典 子

要 旨

本稿は、感情を表す動詞のうち、「嫌悪」の感情を表す動詞「嫌う」が持つ複数の意味について記述し、それらの意味の関連性を明らかにすることを旨とした。分析の結果、「嫌う」には7つの別義が認められた。それらの別義は「メタファー」と「メトニミー」という比喩により動機づけられている。また、拙論では「感情を表す用法」と「感情以外のものを表す用法」に分けて考察していたが、本稿では「放射状カテゴリー」の概念を援用することにより、包括的な記述をすることができた。

また「嫌う」には、他の動詞「避ける」と意味が近いものもあり、他の感情である「困る」との連続性が感じられるものもあることがわかった。さらには「感覚」という別の領域との繋がりもある例も認められた。

キーワード

感情動詞、嫌悪、多義語、メタファー、メトニミー、放射状カテゴリー

目 次

1. はじめに
2. 先行研究とその課題
 2. 1. 現行辞書
 2. 2. 馬場 (2013, 2015)
3. 分析
 3. 1. 具体的な分析の前に—諸概念の確認—
 3. 1. 1. 放射状カテゴリー

3. 1. 2. 比喩の下位分類「メタファー・メトニミー」
3. 2. 基本義の認定について
3. 3. 「嫌う」の意味分析
4. まとめ

1. はじめに

本稿は、感情を表す動詞（以下「感情動詞」という）のうち、「嫌悪」を表す感情動詞「嫌う」の意味分析を行うことである。

馬場（2013, 2015）では、「嫌う」の基本義と別義を抽出し、その意味拡張を記述した。しかしながら課題も残された（後述）。よって本稿では嫌悪を表す感情動詞「嫌う」の意味について再考し、包括的な記述を目指す。

2. 先行研究とその課題

2. 1. 現行辞書

「嫌う」に関しては、小泉他編（1989）がある。

小泉他編（1989）「嫌う」

(1) 自分の気持ちにそわないのでいやだと思う。

(例) 弘はその女性を嫌っている・酒飲みは甘いものを嫌う・今の若者は他人の干渉を嫌う

(2) ある状態や物に弱く、それによって損なわれがちである。

(例) 金魚は水道水を嫌う・タバコは湿気を嫌う・この観葉植物は寒さを嫌う

(3) よくないこと、忌むべきこととして避ける。

(例) 日本人は友引の日の葬式を嫌う・欧米の人々は13の数字を嫌う (pp.165-166より引用者が一部要約、下線は引用者)

(1) の下線部「いやだ」とは、漢字表記すれば「嫌だ」であり、「嫌う」

と同じ漢字表記を含んだ形容動詞になる。つまり動詞の説明を、他の品詞で言い換えたにすぎない。また、「酒飲みは甘いものを嫌う」は「気持ちにそわない」のではなく「嗜好に合わない」例である。(2)についても「何が損なわれがちになるのか」が十分に記述されていない。(3)については「忌むべきこととして避ける」という説明は限定が強すぎると思われる。また(1)~(3)の別義間の関連性についての言及はない。よってさらに詳しく分析する必要があると思われる。

2. 2. 馬場 (2013, 2015)

馬場 (2013, 2015) では、「嫌う」の複数の意味における拡張のプロセスと動機付けについて考察した。しかし「感情を表す用法」と「感情以外のものを表す用法」に分けて考察を行ったため、「嫌う」という1つの動詞からの意味の拡張という観点から、一貫性をもって考察することができない点が課題として残された。

3. 分析

3. 1. 具体的な分析の前に一諸概念の確認一

具体的な分析に入る前に、本稿で扱う諸概念について確認しておく。拙論ですでに述べたが、「嫌う」には複数の別義が認められた。本稿では「嫌う」の包括的な記述のため、認知言語学における「放射状カテゴリー」と比喩の下位分類である「メタファー」と「メトニミー」の概念を用いる。よってここではその概念を説明する^(注1)。

3. 1. 1. 放射状カテゴリー

拙論で残された課題を解決する方策として、本稿では「放射状カテゴリー」の概念を援用する。

本稿で扱う「嫌う」は、複数の語義をもつ多義語である。認知言語学においては、多義語にはプロトタイプ的な意味、すなわち基本義（基本義の認定については3. 2. で詳しく述べる）が存在し、そこからさまざまな

動機付けにより意味が拡張していくと考える。このような基本義を中心に複数の意味が拡張していく形態は、多義語のカテゴリー・モデルであるが、その中でも「放射状カテゴリー」と呼ばれるものがある。これは Lakoff (1987) によって提唱されたモデルで、「あるプロトタイプの成員（メンバー）を取り囲むように2次的に周辺の（非プロトタイプの）成員が位置づけられ、その2次的な成員を中心にして、さらに3次的に周辺の成員が位置づけられるというように、結果として幾重もの円が放射状にカテゴリーを形成すること（辻（2013：340））」である。

以上の説明を図にすると以下ようになる（図1）。

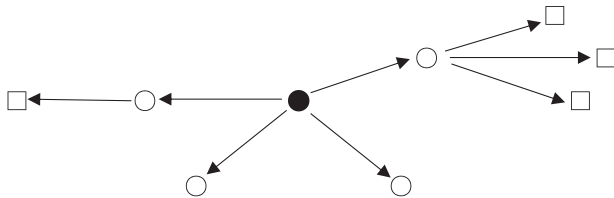


図1（辻（2013：340））

図の●は最もプロトタイプの成員（1次的成員）であり、その●を中心
に、○は2次的成員、□は3次的成員が位置づけられる。このとき、最も
中心的な成員と周辺の成員との間に、意味的な拡張の動機付けがあれば、共時的には両者の間には共通する特徴が見いだせない場合もある（注2）
（辻（2013：340））。

次にカテゴリー拡張の動機付けとして必要とされるのが、メタファーと
メトニミーという比喩の下位分類である。

3. 1. 2. 比喩の下位分類「メタファー・メトニミー」

「メタファー」は初山（2002:65）によって、下のように定義されている。

メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の
事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

(下線は引用者)

初山はメタファーの例として「正月休みに食べ過ぎて、ブタになってしまった (p.65、例文5、下線は原文のまま)」を挙げている。これはブタの太っている体型と、例文5の人の体型の「類似性」に基づき、ブタで「太った人間」を表している。またそのほかの例として、「目玉焼き」(卵料理の全体的な形が人間などの目に類似している)などが挙げられている。

次に「メトニミー」について初山(2002:76)は以下のように定義している。

メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。(下線は引用者)

メトニミーにおいて重要なのは、「隣接性」と「関連性」である。「隣接性」を表す例としては、「一升瓶を飲み干す」「鍋の季節がやって来た」などがある。これはそれぞれ「一升瓶」や「鍋」に隣接する「(一升瓶に入った)酒」「(鍋の中の)料理」を表している。また「関連性」については、初山(2002:79)は「Aさんは本当に酒が好きだ(例文32)」「やっとレポートが終わった(例文33)」を例として挙げている。また「レポート」とは「レポートを書くこと」を表している。つまり、それぞれの「もの」を表す言語形式で、「ものに関わること(酒を飲むという「行為」、レポートを書くという「行為」)」を表している。

以上、本稿で扱う諸概念について確認した。次に基本義の認定について確認する。

3. 2. 基本義の認定について

本稿で扱う感情動詞「嫌う」を、拙論では「感情を表す用法」と「感情以外のものを表す用法」に分けて分析した。しかしこの2つの用法間の関連性については言及することができず課題として残された。本稿ではこの2つを包括的に記述するために「基本義(プロトタイプの意味)」を認定し分析を進める。

基本義とは、さまざまな意味拡張の起点となる語義であり、放射状カテゴリの中心となるものである。本稿では舩山（2002：107）、舩山・深田（2003：142）にしたがい、以下のような要件を満たしている語義を基本義と認定する。

基本義：複数の意味の中で最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、中立的なコンテキストの中で最も想起されやすいといった特徴を有する語義。（舩山（2002：107）、舩山・深田（2003：142）より引用者が一部改変）
では次節から具体的な分析に入る。

3. 3. 「嫌う」の意味分析

別義1^(注3)（基本義）：〈感情主が〉〈ある人物やモノ（の持つ属性）や事態に対し〉〈自分の嗜好基準と合わないため〉〈拒否反応を示す〉

（対象が具体的なもの）

- 1) イングランドの人はフリーガンを嫌っていることを覚えていてください。

(<http://www2.asahi.com/2002wcup/kaisai/osaka/020419a.html>)

- 2) 両親も日本人を嫌っていたように日本人も米国人のことを怪物や悪魔だと思っていたと知った。

(<http://mytown.asahi.com/nagasaki/news02.asp?c=5&kiji>)

- 3) アウネスト・ブラドンと変名したジョウジ・ジョセフ・スミスと、看護婦アリス・バアナムとが知りあいになったのは、英国南部の海岸町アストン・クリントンだった。バアナム家は、そうとう手広くやっている石炭屋で、父母と、アリスのほか五人の兄弟姉妹があったが、ブラドンのスミスは、最初から、そのたれ[ママ]にも気受けがよくなかった。ぐうたららしい彼の容貌や態度が、家人の気に入らなかつたのだ。ことに父親の老バアナムは、ひどくブラドンを嫌って、娘に会うために家を訪問して来ることを、きっぱり断った。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/000304/files/1877.html>)

(括弧内および下線部は引用者)

- 4) 最近、子どもがやたらと虫を嫌います。名古屋市衛生局の統計ではセミやバッタといった普通の虫ですら嫌う率の多い世代は子どもと主婦だという結果が出ています。

(<http://www.sinfonia.or.jp/~isoptera/myhtm/mushi.html>)

- 5) うちの御住持さまは大変に犬を嫌っていなすった。

(www.aozora.gr.jp/cards/kidou/htmlfiles/kitsune.html)

1)~5) の例は、「人や生き物」といった具体的な対象に対して、感情主が「よくない印象」を抱いていることを示している (cf. 「気持ちにそわない」(小泉他編 (1989)))。この「よくない印象」は何故生まれるかを考えてみると、それは自分の「嗜好 (ものの好き嫌い)」が判断基準となっているからだと考えられる。つまり、社会的な通念に照らして、ある対象の善し悪しを決めているのではなく、感情主の嗜好基準に合わないために、ある対象に対して拒否反応を示している。これが「嫌う」の基本義だと思われる。

(対象の具体性が薄れ抽象度が高くなるもの)

- 6) 男性用化粧品大手のマンダムは4~6月のヘアカラーの売り上げが前年比50%増と好調だった。担当者は「男性の毛染めが、W杯効果でそれまで嫌っていた中高年層に受け入れられるようになり、市民権を得た」と分析する。

(<http://www.asahi.com/life/shopping/020724a.html>)

- 7) 無理からぬことと思います。家内はもともと消極的な女で実につつましい片隅の家庭生活の幸福だけを私に望んでいたので、所謂私の世間的な出世や華々しい成功などは寧ろ嫌っているのでありました。 (www.aozora.gr.jp/cards/ozakihotsumi/files/isyo.html)

6) 7) の例のように、「嫌う」対象は人や虫や犬のような具体物ではなく、「男性が毛染めをすること」「出世や成功」という事態に対しても用いられる。6) は、W杯以前は中高年層の男性が若い男性が毛を染めるこ

とに対して、「毛染めは女性がおしゃれでするものだ（それなのに男性が同じように髪を染めるなんておかしい）」、あるいは「毛染めとは白髪染めのことだ（だから若い男性が黒髪を染める必要はない）」という「毛染め」に対する嗜好基準を持っていると考えられる。そして「若い男性が個性の演出として毛を染める」という実態に拒否反応を示している。また7)は、亡くなった妻は生前消極的な人で、家庭の慎ましくやかな幸福だけを夫に望んでいた。つまり妻にとっては、慎ましく平凡に暮らすことが自分の嗜好基準に合っていた。しかし、これとは反対に夫の出世や成功という華々しいものに対しては、拒否反応を示していると考えられる。

別義2（別義1からのメトニミー）：〈感情主が〉〈ある事柄や事態に対し〉〈自分の信念や願望と合わないため〉〈反意を持つ〉

- 8) (米国の治療共同体「アミティ」の主宰者2人へのインタビュー記事) 前身のシナノンが営利企業化したのを嫌って脱退したナヤさん(代表)とベティーさん(事務局長)たちが、80年代からカリフォルニア州などでプログラムを発展させてきた。

(<http://mytown.asahi.com/tama/news02.asp?c=5&kiji=345>)

(冒頭の括弧内は引用者による補足)

- 9) 部落内の農家へは、自作百姓の豊作と栄三と金平とが雨の降る日毎に廻った。

「どうもよく降りますね。新道は、まるで泥田のようですよ。それで一つ。住宅の人達にも寄附して貰って、砂利を敷き度いと思うんですが、幾らでも、お思召しで結構ですから寄附して頂き度いと思ひましてね。」

豊作が先ず斯う、燥(はしゃ)いだ口調で切り出したのであった。「砂利を敷くんですって? わたしゃあ、砂利を敷いた道路を歩くのあ大嫌いでさあ。わたしの歩くどこだけ、細くあけて置いて貰いますべ。砂利を敷いたごろろ路ばかりあ、わたしゃあ、何んと思っても嫌いでさあ。」斯う言って甚吉はその寄附を撥付(は

ねつ) けた。

彼は、極端に土地の発展を嫌っているのだ。彼は何処までもじみに百姓を続けて行こうと思っているからであった。

(www.aozora.gr.jp/cards/000134/files/2724.html)

8) になると、別儀1のような〈自分の嗜好基準に合わない〉という単なる嗜好の問題だけではなく、〈自分の信念や願望に合わない〉という意味特徴も必要になってくる。そしてさらに「営利企業化したのを嫌う」とは、「治療共同体を利益追求型の企業にする」という考え方に対してそうすべきではないという反対の意を持つ」とも受け取れる。また9) は、「今まで通り何も変わらないままの百姓の生活がよい」という願望を持っていると思われる。よって（「新道ができ、そこに砂利を敷く」という）「土地の発展」は、変化を好まない彼の考えには合わず、むしろ反対の気持ちを持っていると考えることができる。つまり別義1での〈嗜好〉という判断基準から、8) 9) では〈自分の信念や願望〉というより強い判断基準になっており、さらには〈拒否反応を示す〉という心理状態が〈反意を持つ〉という信念や願望に基づいた強い拒否反応を表すようになっていく。そしてこの〈反意を持つ〉ことが焦点化されているとも考えられる。次に示す例は、6) 7) と8) 9) の中間例に当たると考えられるものである。

- 10) 生協の人たちが花見やスキーをしに来るようになり、酒杯を交わしながら話した。「虫食いの跡があるキャベツは食べられても、生きた虫が挟まっていたらどうか」と問うと、農薬使用をあれほど嫌っていた相手が「生きた虫は嫌だ」とこたえた——。そんな肉声を聴くこともできた。

(<http://mytown.asahi.com/yamagata/news01.asp?c=5&kiji=382>)

農薬使用に関しては、(どんな農薬を使ってよいかは)「批准書」で細かく取り決められている。したがって生協の人は、農薬を使用することに全面的に反対しているわけではない。また農薬の使用は長期的に見れば、人体に何らかの影響を及ぼす可能性もあり、農薬の使用は単に〈嗜好基準に合わない〉と片付けられるものでもない。よって10) の例は〈嗜好基準に合

わない」という基本義と〈ある事態に対して反意を持つ〉とい別義2の中間にあたる例だと考えられる。

以上、別義2（および別義1との中間例）を見たが、別義2は、自分の願望と合わない結果〈反意を持つ〉というところまでを含意している。よって別義2は、別義1からの因果関係のメトニミーにより意味が成立していると考えられる。

では、次の例を見てみよう。以下の例は、10)の例と使われ方が近いが、感情主の行為がより強く感じられる例である。

別義3（別義1からのメトニミー）：〈感情主が〉〈ある事態が〉〈自分の嗜好（考え）と合わず〉〈(結果として) その事態を行わないようにする〉

- 11) 20世紀イギリスの代表的な陶芸家ルーシー・リーさんの回顧展が、滋賀県信楽町の県立陶芸の森陶芸館で開かれている。(中略) 今年はリーさんの生誕100年目。これにちなんでアメリカの個人コレクターの収集品を中心に、国内の美術館などからも集めた約100点で回顧する。

ウィーン生まれだが、ナチスの迫害を避けて38年に渡英。リーさんらしさが出るのは50年代以降で、65年には線を引き下地を見せる掻（かき）落としと、別の土などを埋め込む象嵌（ぞうが）んで、繊細さが際立つ「花生（はないけ）」(京都国立近代美術館蔵)を生み出した。釉薬（ゆうやく）を窯の中で流れるままにした作品もあり、窯まかせを嫌う西洋の作家の中では珍しい。60年代の取っ手のないミニカップなどは、日本の湯飲みといっても不思議ではないほどだ。

(<http://www.asahi.com/culture/bunka/K2002052103089.html>)

11)の例は、「西洋の作家は、釉薬を窯の中で流れるままにして焼き上げるといふようないわゆる「窯まかせ」の焼き方は好まず（または自分の考えに合わず）、そのような手法は取ろうとしない」という意味である。この例では、「窯焼き」という陶芸の仕事について、その手法の是非が問題

になっているので、単なる「好き嫌い」のレベルにはとどまらず、別義2のように「自分の考え」も併せて反映されていると考えることもできる。その点では、別義2とも近いと言える。ただし、別義2との違いは、別義2が〈反意を持つ〉ことまでを意味するのに対し、11)の例は「「窯まかせ」という手法が自分の嗜好基準（考え）と合わないため、結果としてその事柄（「窯まかせにすること」）を行わないようにする」という結果の事態に焦点が当たっていると感じられることである。

よって別義3は、別義1よりもさらに、「結果の事態」を表すため、別義1からの因果関係のメトニミーにより理解可能になっていると考えられる。

さて、次に見る例は「感情としての嫌悪感」が少し薄らいでおり、むしろ他の動詞「避ける」とも連続性が感じられる。

- 12) 南大植は洪明甫をスーパーに起用した理由を振り返る。(中略)
 一対一には弱さがあり、混乱で身体接触を嫌う——。

(<http://www.be.asahi.com/20020525/W14/0037.html>)

- 13) 文芸春秋棋院 直木 菊池 手直り表 [#「直木」と「菊池」の
 中間に「手直り表」]

一月十一日 三目 直木勝

同 同

一月一二日 同

(中略)

一月二十九日 三目 菊地勝

二月八日 菊地勝

二月九日 菊地勝

日付のないのは、何日に打ったのか分らない。一晚にたいてい一局しか打たなかった。

直木は、正月になると（今年から碁は、誰にも負けない！）と、豪語した。また自分に不利な三目ではあるが、五番つけざまに負けた。この表には、かいてないが、もう一番自分は、四目になるのを嫌って

三目で打って負けたように記憶している。

(<http://www.aozora.gr.jp/cards/kikuchi/htmlfiles/gonotenaori.html>)

スーパーとは「サッカーでディフェンダーのうち、マークする特定の相手をもたず、ゴールキーパーの直前に位置する選手（『大辞林』（第二版）p.1318）」のことである。このポジションに洪明甫選手が起用された理由の一つは、「選手同士が試合中にボールを奪いあうためにかなり激しい動きをし、身体がぶつかることも頻繁にあるが、洪明甫選手はそのような接触はしたくない、避けたいと思っている」からだと思える。つまり、感情主がある事態に対して、自分にとってそれがマイナスの事態を引き起こすと判断し、その事態を回避することだと考えられる。さらに13)の例だが、これは囲碁の対局の話であり、「四目で攻めると不利になる（または勝てない）と思い四目の攻め方を選ばなかった、つまり避けた」ということである。「四目を嫌って三目で打った」という表現から、「四目の攻めをしなかった」ということが明確に示されている。

この「ある事態を回避する」という点については小泉他編（1989）の「嫌う」の意味特徴「(3) よくないこと、忌むべきこととして避ける。」と一部重なる。また、「身体接触をしたくない、身体接触を避けたい」という背景にはそのような接触によって、怪我をする可能性や、接触した選手と口論になるかもしれないという、「自分にとって不利益なことを回避したい」という気持ちが存在するからだと思われる。この「避ける、回避する」という意味特徴は、前述した小泉他編（1989）の（3）に挙げられているが、限定が厳しすぎると思われる。何故なら、この記述に従うと「避ける」という意味で「嫌う」を用いた場合、その対象となるのは、必ず「よくないこと、忌むべきこと」でなければならなくなってしまうからである。では次の例を見てみよう。

14) 「(新潟県人で「Uターン型」あるいは「天上大風型」と言われる人は) 厳しい風土を嫌って出て行きながら、もう一回覚悟のうで帰ってくる。」(<http://mytown.asahi.com/niigata/news01.asp?c=5&kiji=93>)

15) 「それで今日独身で立とうという女子があれば、やむをえない事

情からの覚悟であって、決して結婚を嫌っているのではないのです。」

(www.aozora.gr.jp/cards/yosanoakiko/files/jyosinodokuritsujiei.html)

14) 15) も12) と同じく「避ける」に近い意味で用いられている。13) は「新潟県人のタイプのうち「Uターン型」あるいは「天上大風型」といわれる人は、新潟の厳しい気候や生活条件が自分には合わないため、この厳しさから逃れる（避ける）ために新潟を出て行き、そしてまた帰ってくるタイプの人である」と読みとれる。また14) は、「独身を通そうとする女性は、それなりの事情があるのであって、結婚を（したくないから）避けているのではない」と理解できる。これを小泉他編（1989）の記述に沿って説明すると、「厳しい風土や結婚はよくない、忌むべき事であるから避ける」という意味になってしまう。「厳しい風土」がよくないことか否かは議論が分かれるところかもしれないが、少なくとも「結婚」がよくないことであるという説明は成り立たないと思われる。よって小泉他編(1989)の「よくないこと、忌むべき事として」という記述は、限定が強すぎ妥当ではない。

さらに「厳しさに合わない」という点は、厳しい風土（気候条件など）が自分（の体）に合わない、つまり「感覚的に合わない」と考えることができる。また結婚は好き嫌いの問題ではなく、「結婚（生活）が自分に合うか合わないか」が問題となっていると思われる。

さらに次に挙げる例は、他の動詞「困る」との連続性も感じられる。

16) 子供の頃、外へ出て思い切り遊んだ。しかし、今の子供は動かない。「もう危機的ですよ。ぜんぜん鍛えられていない」。子供に原っぱで遊べって言っても、子も親も汚れるのを嫌うから無理だ。

(<http://www.be.asahi.com/20020928/W11/0035.html>)

17) たとえば台所で洗い物をする迫さんは、コップや皿の底の丸い出っ張りをことさら念入りに洗う。誰かに教えられたわけでもない。思い起こせば生家の台所で、目に触れないところでも黒ずんでしまうのを嫌う几帳面（きちょうめん）な母親が長年、そうし

ていた姿を記憶に焼き付けていたからというほかない。

(<http://www.be.asahi.com/20020713/W21/0001.html>)

16) は、子どもとその親たちが「汚れてしまうこと」に対して、単に「よくない印象を抱く」だけではなく、「服が汚れたら困るから汚れないように遊ぼう」という心理が働いているためだと推測できる。子どもの側からすれば「服が汚れてしまったら、お母さんに叱られるかもしれない。」と思うであろうし、親の側からすれば、服を汚して帰ってきた子どもに対して「どうしてそんなに汚してきたの。洗濯が大変じゃない。」と言うかもしれない。その双方に共通するのは、「服が汚れたことによって自分が不利益を被る」という心理だと考えられる。また17)は、きれい好きな母が「台所の見えないような場所が黒ずんでしまうこと」に対して、単に「よくない印象を抱く」だけではなく、一種の「拒否反応」が表れるためだと思われる。そしてその拒否反応の裏には、「台所の見えないような場所でも黒ずんでしまったら、見た目だけでなく（カビなどの雑菌がついて）不衛生だ。ほかの食品などを使うときに菌が付着するのは困る。だから（黒ずまないように）きれいにしよう。」という心理が働いているからだと思われる。以上のことから、「嫌う」という感情が「困る」という感情と連続性があることが示唆される^(註4)。

さらに、16) の例では、「服が泥だらけになったらべたべたしたり臭いが気になる」などという「汚れ」に対するマイナスの感覚も喚起されるように思われる。また17) の例も同様に、「台所の黒ずみは不潔で見た目もよくないし、臭いも気になる」という「感覚」が喚起される。

以上見てきたような例では、「感情としての「嫌悪感」」はかなり薄いように思われ、むしろ感覚的な嫌悪感が強く出ているように感じられる。

このように「嫌う」には他の感情とも連続性があり、さらには感情という特定の精神活動から、「感覚」という別の領域との繋がりもある例が存在する。

さて、今まで見てきた例は感情主が人間であったが、主体が人間以外の

ものでも「嫌う」を使って表現できる。

別義4：(別義1からのメタファー) 〈生物が〉〈あるモノやその属性に(接触することに) 対し〉〈拒否反応を示す〉

18) 動物が人間のにおいを嫌うためこの橋を人間が通行することは禁止されています。

(<https://books.google.co.jp/books?id=bysoDgAAQBAJ>)

19) *猫は体が濡れるのを嫌う。(* は作例)

18) 19) の例は、主体が人間ではなく動物であるが、動物が人間と同じように「嫌悪」という感情を持っていることを示しているのではない^(注5)。それは人間が「ある対象や属性に心理的生理的に拒否反応を示すこと」と「動物がある対象や属性に関して拒否反応を示すこと」との間に類似性を見だし、それを「嫌う」と表現しているのである。よって別義4は別義1からのメタファーにより理解可能になっていると考えることができる。また、これらの生き物の拒否反応は、「におい」であったり「体が濡れたりする」のように、嗅覚や触覚が直接刺激されることにより起こる反応である。

別義5：(別義4からのメトニミー) 〈生物が〉〈ある対象に接触することによって〉〈生命力が弱くなる〉

20) *ナメクジは塩を嫌う。

21) 「虫菌」と「歯周病」おなじ菌に関する病気なのですが、違う種類の細菌が関係しています。空気が好きな細菌(好気性菌)と空気を嫌う細菌(嫌気呼吸)です。

(http://www.iat.co.jp/Yui/20020601_report.html)

22) じかまきは、花壇または育てたい場所に、直接種を蒔くこと。主に根が直根型で移植を嫌う植物などは、この方法をとる。

(<http://wwwi.netwave.or.jp/~siki/yougoshu2.html>)

23) 環境・土質：ほとんどのハーブが地中海沿岸原産なので、日当た

りがよく乾燥ぎみの環境を好み、酸性土壌を嫌います。

(<http://www.booktown.co.jp/hai/herb/kind/sentaku2.html>)

20) はナメクジが塩に接触すると体の水分が抜けてしまい、本来の生命力がそがれることを「嫌う」で表している。また21) は、歯周病の原因である菌は、空気に触れないような場所である歯肉、歯根膜、歯槽骨など、歯を支えている歯周組織の奥へ入り込んでいて活動するが、空気がある場所(例えば歯の表面)では活動しないことを「嫌う」で表している。さらにこの2例に特徴的に見られるのは、「対象に接触することによって生命力が低下する」点である。ナメクジに塩をかけると体から水分が抜け、弱ってしまう。それは「ナメクジが塩という対象に触れた瞬間」から始まる。また空気を嫌う菌は空気がある環境では増殖しない。これも「歯周病の菌が空気という対象に触れた瞬間」から始まると理解できる。つまり対象に接触したと同時に、ナメクジと菌は生命力が低下するのである。このことから、別義5は別義4からの同時性および隣接性のメトニミーによる意味の転用だと考えることができる。また22) と23) は植物が主体である。22) の「根が直根型」とは、根が分かれずまっすぐに伸びるタイプの植物であり、このような植物は根が切断されると再生が難しいとされている。つまり「移植」の際にスコップなどに触れ根が切断されると生命力が弱ってしまうのである。また23) は酸性の土に触れることで生命力が弱ることを示している。また22) と23) の例では、人の手が関わっていることが特徴的で、これは後で述べる別義7につながるものである。

別義6：(別義5からのメタファー)〈モノが〉〈他のモノと接触することによって〉〈本来持っている機能が低下する、あるいは性質が変化する〉

24) 電子部品のように、湿気、酸素、空気との接触を嫌うものの包装や、薬品や粉末のように湿気を嫌うもの、防湿効果が必要な工業製品の包装、錆を防止して保存するものなどを長持ちさせるにはガスバリアー性の高い包装資材が最適です。

(<http://www.finepack.co.jp/sinkuu.html>)

25) *レタス／海苔は金気を嫌うので、包丁を使わず手でちぎるとよい。^(注6)

24) は「電子部品が湿気や酸素や空気に触れると、変色や錆びなどを起こし、電子部品の機能が低下すること、または機能そのものに異常をきたすこと」や、「薬品や粉末のように湿気によって変質したり本来持っている性質が損なわれること」を指して「嫌う」と表現している。また25) は料理のときによく使われる表現だが「レタスや海苔は包丁を使うとナイフや包丁などの金属に反応して味が落ちるので手を使った方がいい」という意味である。つまり25) は金属製のナイフや包丁に触れることによって、本来持っている性質が変化することを示している。この25) はレタスを主体にした場合、次に述べる別義7との中間例とも感じられる。

別義7 (別義5からのメトニミー) : 〈果物や野菜が〉〈人間の手に触れることによって〉〈果物や野菜の持っている鮮度が低下する〉(「手を嫌う」という固定化した表現) ^(注7)

26) 以前は家にも「梅」も「紫蘇」もぎょうさん(沢山) 生りましたんで全て自家製でした。「梅は手を嫌う」なんて言って綺麗に色が出ないこともある……と家の姑様がゆうておられました。私は大層好かれていたらしく何時も綺麗な色が出ます。

(<http://www2.odn.ne.jp/~aaj64280/pages/gokemidoro9.html>)

27) “カブラは手を嫌う”という諺があるが、漬ける人によって赤くきれいな色になることと、赤みの少ないことがあり、きれいに漬ける人をわざわざ頼んできて漬けてもらう家もあった。

(http://cscns.csc.gifu.gifu.jp/virtual_museum/sanpo/yuki/1/10-15.html)

28) 私の地元では「ほうれん草は手を嫌う」と言われています。どうも私はほうれん草サマとは相性が悪いみたいです。

(<http://www.arisfarm.com/wwwboard/messages/254.html>)

筆者が調べた限りでは、26)～28) のように「果物・野菜」が主体となっている。そして「(果物・野菜は) 手を嫌う」という固定した形で用いら

れる。そして〈果物・野菜が、(人によっては)手に触れるとその果物・野菜の性質が損なわれる〉という意味を表す。

別義5は「生物がある対象に接触することによって生命力が弱くなる」ことであったが、別義7は「生物のその一部である野菜や果物が、モノの一部である人間の手に触れることによって鮮度が落ちる」ということである。よって別義7は別義5からの「全体一部分」関係のメトニミーによって理解可能になっていると考えられる。

以上の考察を図にまとめると以下のようになる。

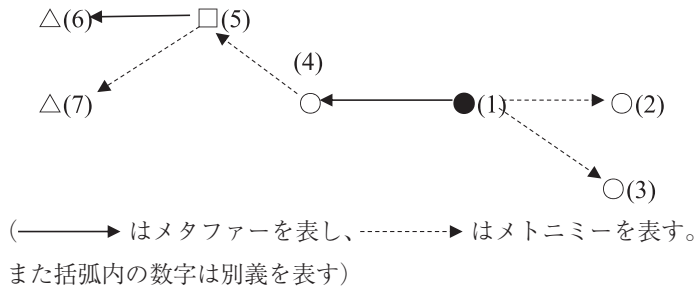


図2 「嫌う」の放射状カテゴリー

4. まとめ

本稿では、感情を表す動詞のうち、「嫌悪」を表す感情動詞「嫌う」をとり上げ、その意味の関連性を明らかにすることを目指した。分析の結果、「嫌う」には基本義を含め7つの別義が認められた。それらの別義は「メタファー」と「メトニミー」という比喩により動機づけられている。また、「放射状カテゴリー」の概念を援用することにより、拙論で課題になっていた「包括的な記述」をすることができた。

また分析を進める課程で「嫌う」には、他の動詞「避ける」と意味が近いものもあり、他の感情である「困る」との連続性が感じられるものもあることがわかった。さらには「感覚」という別の領域との繋がりもある例も認められた。

注

- 1 比喩の下位分類にはこの2つのほかに「シネクドキー」もあるが、本稿の分析には使用しなかったため割愛する。
- 2 また、放射状カテゴリーは、「周辺の成員から隣接する別のカテゴリーの周辺の成員へと連続的に接続することも想定されており、カテゴリーの連続性を明示的に記述するのにも優れている。」(辻 (2013: 340))。本稿では「嫌悪」の感情と連続性がある感情を示すことも目的としているため、その意味においてもこの放射状カテゴリーの概念を援用することは有益であると考ええる。
- 3 本稿では基本義も一つの別義であることから、「別義1」という表記を用いる。文中での説明の際も「別義1」を用いる。
- 4 16) 17) の例は、これまで見てきた例とは異なり、基本形の方が自然であり、テイル形は用いられにくいと感じられる (なお、17) の例は「母親」を感情主にして書き換えて示す)。

? 16)' 子供に原っぱで遊べって言っても、子も親も汚れるのを嫌っているから無理だ。

? 17)' 母親は几帳面な性格で、台所で目に触れないところでも黒ずんでしまうのを嫌っている。

これらの例が基本形で用いられた方が自然だと感じられるのは、これらの例が習慣を表す例に近い (例:「朝はいつも6時に起きる」) からだと思われる。しかし、これらの例が本文で述べたように、「困る」と連続性が感じられることも関係しているのではないかと現時点では考えている。「困る」も16) 17) の例のように、基本形で1人称感情主の感情を表すことができる (例:「彼は約束の時間にいつも遅れて来るので(私が) 困る」)。よって今後「困る」の振る舞いを分析することによって、この点も明らかにできるという見通しを持っている。

- 5 米エモリー大学の神経科学者グレゴリー・バーンズ氏は、イヌに感情があるのかどうかを調べるため、イヌがMRI (磁気共鳴画像装置) による検査に耐えられるよう訓練を行った。バーンズ氏は「動物が感情を持つという概念は、科学者にとっては受け入れにくいものですが、イヌと暮らしている人の大半はこれを直感的に理解しています。人間は言語を持ち、さまざまな感情に愛、恐れ、悲しみ、罪悪感などの言葉を当てはめることができます。人間とイヌは別物と考えると間違いがちなのはそのためです。実験では、イヌのポジティブな感情を

引き出すことによって、イヌの脳にも、人間の脳に対応する部位があることがわかってきました。」と述べている。このように近年、動物の感情についての研究が始まっているが、詳細については今後の研究結果を待ちたい。(以上『日経ナショナルジオグラフィック』(2017.9.25)より引用者が一部改変)

- 6 レタスは植物であるが、根がついた状態のものではなく、食品(つまりモノ)としてのレタスである。
- 7 『大辞林』(第二版)には「手を嫌う」についての語義説明はない。

引用文献

- 小泉保他編(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 辻幸夫(2013)『新編 認知言語学キーワード事典』研究社
- 馬場典子(2013)「嫌悪を表す動詞の意味分析-「嫌う」と「疎む」-」『言葉と文化』第14号 57-73, 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 馬場典子(2015)「「嫌悪」を表す動詞(句)の意味分析-「嫌う」と「疎む」を中心に-」第149回現代日本語学研究会(2015年2月28日、於:名古屋大学)発表資料
- 松村明編(1999)『大辞林』(第二版)三省堂
- 初山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』町田健(編)(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤)研究社
- 初山洋介・深田智(2003)「意味の拡張」『認知意味論』松本曜(編)(シリーズ認知言語学入門 第3巻)73-134, 大修館書店
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (『認知意味論 言語からみた人間の心』ジョージ・レイコフ著 池上嘉彦・河上誓作他訳 紀伊國屋書店)

実例出典

- 青空文庫 (www.aozora.gr.jp/)
- 朝日コム ([http://www.asahi.com./](http://www.asahi.com/))
- 検索エンジン Google (<http://www.google.co.jp/>)
- 『ナショナルジオグラフィック』(<http://natgeo.nikkeibp.co.jp/>)